



お伽訓話

無精な蟻

硯 山 人

或る立派なお庭の梅の木の根の處に小さな蟻の穴がありました。其穴から小さな蟻が出たり入つたりして一生懸命餌を引張つて來ては巢の中へ運び又出て來ては又入りして澤山の蟻共が働いて居ました。そうしますとお池の石の上に皆の働くのをぼんやり眺めて何もせず遊んで居る蟻が一匹ありました。其蟻がさもさもつまらなさうに

「まあ此暑いのに皆んなはあくせく汗水流して働いて居るが まあ何んともつまらないではないか 世の中にあたしたちの仲間程つまらない者は無いおうら

の坊ちやんやお嬢さんたちはあの涼しいお縁側で女中たちに團扇であふがせ乍らアイスクリームとか何とか云ふものを呑ろ。涼しいの冷いのと聞くさへにくらしい。私もどうかしても少しらしくに暮される者にならふ。」

と獨り言を云つて居ましたがやがてうろ／＼櫻の木へはい上り始めました。見ると上の枝の葉の處にきれいな蝶々が羽を休めて靜かに眠つて居ます。蟻は之を見付て大よろこび。

「そう／＼あたしも蝶になつて毎日／＼奇麗な花の上を飛んで歩き甘い露を吸つて樂々と暮さう。蝶程樂ない、ものはない。どれ一つ蝶々の仲間入させて貰ひませう。」

と靜かに蝶の側へ行つて。

「もし蝶々さん／＼一寸と起きて下さい。」

と小聲でいつて見ましたが、よく眠つて中々起きそうにもしませんので、そつと脊中へはい上り耳のそばで。

「もし蝶々さん少しお願したい事がありますから起きて下さい」と云ひますと蝶々はびつくり仰天何者が脊中へさわつたのだらふ。あ、うつかりつかれて眠つた間に又坊ちゃんのみにかゝつたかしら。と。思ひ乍らあたりを見ますと、やはり今迄の葉に止つて居ました。脊中に蟻が一匹居ました。

いつぞや、紫の小さい妹蝶が花に遊びつかれて、花壇の隅に眠つた時蟻が澤山来てとうくさし殺されてしまつた事もありましたので、蟻と見てはびつくりし大急ぎ振り離して飛んで逃げやうとしますと蟻は。

「蝶々さん、決して私はあなたを刺しは致しません。實は私は蟻がつまらなくて仕方がないので蝶々さんのやうにいつも奇麗な花の上で楽しく暮りたいと思ひますどうか私をお仲間に入れて下さいませんか。」

と手について頼みますので、蝶もやつとまづくと小さい胸をなで、安心しました。

「蟻さんそれはとんだお考へ違いです。私共は決してく、楽しく暮しては居りません。それはあなたの方のやうにきたない土の上にごそ居りませんが、此花は奇麗だから少し休んで露でも吸ひませうと思つて羽を休めますと坊ちゃんも網を持つて来てつかまつてしまひ。之は奇麗だから標本にしやうなどと云つてピンで板へ打つけられてしまひますからうつかりゆるく休む事も出来ません。又時にはうまく網を逃げて出し一生懸命うちへ歸らふと裏庭へ急ぎますとあの蜘蛛が大きな巣を作つて居てそれに引かゝらふものならそれが最期とうとうたべられてしまひます。決してくはたから思ふ程らくなものではありません。蟻さんこそいゝお家はあるしだれもつかまへに来る人も者もなしそれに強い力を持つて居らして食へ物も澤山しまつてをありだしほんとうに仕合せではありませんか。他の者をうらやまずにやつぱり今のまゝでいらした方がようございますよ。」

と優しい眼に涙を流して話して聞かせました。がどうも蟻は蝶の親切な言葉に

從ふ氣になれず。

「それでは蝶さんもつまらない。何かほかのものに仲間入しませう。」と云つてぶら／＼出掛けてしまいました。

「蝶もいけないとすると何が、たらふ。」

と考へて居ます間にとう／＼夜になつてしまいました。するとお池の叢で美しくびか／＼光る螢がさも涼しさうにふわ／＼と、水の上を行つたり來たり樂しさうに飛び廻つて居ます之を見た蟻は手を打つて喜び。

「あゝ螢だ／＼あんな樂なものがあつたのに今迄氣が付ずに居たとは僕もよつほどうつかりして居た。どれ一つ相談して今夜から早速一緒に飛び廻らふ。これは有難い／＼。あゝもし螢さんや／＼。」

と大聲に呼び立てました。

螢は靜かな池の面にふわ／＼遊んで居ます處へどこかで呼ばれますので。これはお憐のお光ちゃんが來たのだらうと思ひ乍ら聲の方へ飛んで來ますとそこに

一匹びきの小さな蟻ありが居ゐて、

「螢ぼたるさん〜どうか私わたくしをお仲間ななまじり入いりさせて下さいませんかどこへでもお伴ともして行いき

きますから」。

としきりに頼たのみました。之これを聞きいた螢ぼたるは。

「蟻ありさんとんでもない事こと私わたくし共どもはこうしてたのしさうにして居ゐますもの、短い命いのちで少し寒さむくなれば今いまに死しんでしまいます。それも壽命じゆめいだけちやんと居ゐる者は幾いく匹びきもありませんうつかりと光ひかつて居ゐやう者ものなら。團扇うちあしや箒はらきではたき落おされされて奇麗きれいな籠かごの中なかに入いれられ涼すずしいお縁側えんがはに掛かけて置おかれる迄までは善よございます。大だい事じの〜命いのちの露つゆは時々ときとき臺所たいじやうのおさんどんが邪慳じやけんに水道すいどうの水みづを吹ふつ掛かけられるので其そのくるしさといつたらありません。これも二三日にちであとは日ひぼしちやない水みづぼしですもの。たのしいのらくだのと云いふのはほんの一時ひとときですそれに引ひかへてあなたは長命ながいきもお出来できになるしどんなによいか知しれません。早はやくおうちへいらして皆様みなさんとたのしくをくらしになる方かたがようございます。こ

うして居る中に誰かに見つかると大變、ではさよーなら。」

と又ふわくと向ふの岸へ行つてしまいました。

蟻はさてく何になつてもらくは出来ないものかしら。けれど何かありそうなものたとしきりにうで組して考へて居ましたがやがて。

「あつたく、蚤がい、く、蚤はいつも柔かい蒲團の中にくるまつて晝はらくらくねられるし恐ろしい人間の寢た處へ出掛けておいしい血を吸ふのだからこんなうまい事はないどれ一つ蚤の處へ出掛けませう。」

と庭石傳ひ坊ちゃんのお寢間へと急ぎました途中石につまつき縁側の釘にあたまをぶついたり、敷居の溝へ落ちたりしましたが漸くの事で蚊帳の側まで来て見ますと、思つた通り可愛い、坊ちゃんは柔かいおふとんの中に安々と眠つて居ますので蟻は大喜び。

「おたぞ、く、之で漸くよい者になれるかららかなものだどれ一つ此かや入つて。」

をとそろ／＼隅の方からもぐり込み／＼とう／＼眞つ白い毛布の上まで這ひ上り「之は申々よい心持ちだ。之だけで澤山まだお腹もすかないから坊ちゃんを刺すのはあしたの晩にして今夜は一つらく／＼寝ませう。あ、今迄くたびれた」など、云ひ乍らよい心持でぐつすり寝みました。

やがて翌日になり坊ちゃんのお母さんか床をたゝみ乍ら「をう／＼坊やはゆふべ大變蚤にくわれましたね可愛そうに。さあ母さんが蚤をつかまへませうね」

とおつしやつて毛布を持ち出してお縁側へ行かれました。急に動いたので蟻はびつくり目をさましてあるき出しましたら、お母さんは

「まあ可愛そうに蚤許りぢやない蟻迄が居て悪い事」

と云つてつぶされてしまいましたとき。何でも人をうらやむ者ではありませんのね。めでたし／＼。